

◆資料

## 看護学部学生の国際的活動に関するニーズ調査

Needs assessment on the international activities of the Nursing students

田村 康子 丸山 有希 溝畑 智子

Yasuko Tamura, Yuki Maruyama, Satoko Mizohata

本調査は、本学看護学部学生の国際的活動に関する意識や期待、活動の実態を明らかにし、看護学部における国際的活動の方向性を検討すること、それらの結果をもとに国際的な学びができる学習環境を整えることを目的として実施した。学部1回生83名を対象に無記名の自記式質問紙調査を行った。回収率は42%であった。69%の学生が国際的活動に関心があると回答した。関心がない理由として、「外国に興味がない」、「語学が苦手」、「多忙である」ことがあげられた。本学の全学部生を対象にした海外研修プログラムについて4割が参加を希望した。しかし、説明会については8割が知らず、情報提供の検討が必要であることが明らかになった。参加を希望しない理由には忙しいことが最も多くあげられ、看護学部のカリキュラムを考慮した研修企画のニーズもあることが明らかになった。しかし、経済的負担をあげる者もいた。学内において日常的に異なる文化や外国について知り、体験できる機会を設ける等の国際的活動も意義があることが示唆された。

キーワード：日本語 国際的活動 看護学生 ニーズ  
international activities nursing student needs assessment

### I. はじめに

近年、社会の国際化・グローバル化を反映し、大学における看護学教育においても国際保健や看護に関する教育の重要性が指摘されている。「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告(2011)」では、学士課程においてコアとなる看護実践能力の一つに「社会の動向を踏まえて看護を創造するための基礎となる能力」が含まれ、その中に「グローバリゼーション・国際化の動向における看護の在り方について理解できる」ことが卒業時到達目標として示されている。本学看護学部の教育理念「温かな心を育む教育を基盤として、変化する社会の健康ニーズにコミュニティの観点から柔軟に対応し、だれもが安全・安心・安寧に生活していける社会と人々の健康に積極的に関与していける自立した看護職を育成し、看護学の発展を通して、人類の福祉に貢献する」を構成する5つの教育目標のひとつにおいては、「固有の文化を尊重し、すこやかな社会を創造する人を育む」ことが掲げられ、対象者の背景となる様々な文化を理解し尊重できることが目標としてあげられてい

る。看護職にとって、異なる文化を尊重できることは倫理的な意義も有する。日本看護協会による「看護者の倫理綱領」の条文2において、「看護者は、国籍、人種・民族、宗教、信条、年齢、ライフスタイル、健康問題の性質にかかわらず、対象となる人々に平等に看護を提供する」ことが明記されている。「文化とは人々がどのように生きているかを表したものであり、それを均質にしても固定的にとらえることはできない(黒木, 2014)」ものであり、多様に異なる文化を持つ人々を理解する教育的な機会が学生に提供されることは重要といえる。

本学部における国際交流推進委員会の業務には、学部の国際交流推進に関する活動が含まれており、委員会活動を通してこの教育目標の達成に貢献していくことが求められている。本学部は平成27年4月に開設したばかりであり、国際交流推進委員会として看護学部生のニーズを反映した活動を模索している。そのため、本学看護学部生の国際的活動に関する意識や期待、活動の実態を明らかにし、看護学部における国際的活動の方向性を検討すること、それらの結果をもとに国際的な学びができる学習環境を整えることを目的に質問紙調査を実施した。

## II. 方法

### 1. 調査方法と対象者

本学看護学部1年生86名を対象に調査を行った。全員が履修している授業終了後に、欠席者を除く83名に対し、無記名式質問紙を配布した。授業担当ではない教員が調査の意図を説明した。記入後の質問紙は、学生自らが教室とは別の場所に設けた回収ボックスに入れることができるようにし、誰が回答したかは分からないようにした。調査時期は2015年7月であり、配布から回収まで1週間の期間を設けた。

### 2. 調査内容

調査項目については、看護学部の国際交流推進委員により検討を行った。調査内容は、基本的な情報および国際的活動に関するものから構成した。前者は、年齢、学年、使用可能な言語、国際的活動に関連する資格（英検など）の4項目を含む。後者は、国際的活動への関心の有無とその理由、渡航経験、外国人の友人の有無、大学以外で学習している言語、本学全学部の学生を対象にした海外研修について、国際的活動に関わる上での支障、今後参加したい国際的活動、海外での研修に参加する場合の捻出可能な費用、参加可能な期間、関心を持っている国・地域とその理由、本学の国際的活動に関して大学に期待することの11項目から成る。

### 3. 分析方法

選択式回答質問に関しては、各変数について記述統計値を算出した。分析にはSPSS (version21) を用いた。自由回答式質問に関しては回答の意味内容の類似性に基づき分類した。

### 4. 倫理的配慮

本調査の実施にあたって、調査依頼用紙に目的、方法、倫理的配慮を記載した。倫理的配慮として、調査への協力は自由意思であること、回答しなくても成績評価などには関係せず不利益を被ることはないことを明記した。プライバシーの保護として、質問紙は無記名式とした。質問紙への回答をもって研究参加への同意を得たものとした。データの処理については、年齢や海外渡航歴など個人の特性や経験に関するデータはそれぞれの質問項目における分析のみとし、個人が特定されないよう配慮した。

## III. 結果

### 1. 対象者の概要

回収した質問紙は35部（回収率42%）であった。学年は1年生のみであり、年齢構成は18歳が21名(60%)、19歳が14名(40%)であった。使用可能な言語について11名(31%)が英語と回答した。国際的活動に関連する資格では、17名(49%)が英検の資格を有し、5名

表1 関心のある国際活動 (n=24, 複数回答)

項目	人数	(%)
留学、研修旅行	7	29.2
青年海外協力隊	6	25.0
日本文化や歴史を知ってもらう活動・(観光、交流)	6	25.0
語学の勉強	3	12.5
ユニセフ・貧しい子どもへの医療活動	3	12.5
国境なき医師団の活動	2	8.3

表2 国際活動に関心がない理由 (n=11)

項目	人数	(%)
英語が嫌い・苦手	3	27.2
国際的な活動にふれあう機会がなかったので興味がない	1	9.1
国内で活動していたい	1	9.1
あまり海外に出たいと思わない	1	9.1
コミュニケーションがとれない	1	9.1
今忙しいから	1	9.1
無回答	3	27.2

が準2級、3名が2級を取得していた。

## 2. 国際的活動に関して

### 1) 国際的活動への関心の有無

国際的活動について、関心があると回答した学生は24名(69%)であり、具体的な国際的活動としては、留学・研修旅行や語学の勉強に関するもの、青年海外協力隊や国境なき医師団、ユニセフ、貧しい子どもへの医療活動など海外での医療活動に関するもの、歴史や文化に触れる活動に関するものに大別された(表1)。関心がないと回答した学生は11名(31%)であった。その理由(表2)には、英語が苦手、コミュニケーションがとれないなどコミュニケーションに関する理由(4名)、国際的な活動に触れ合う機会がなかったので興味がない、国内で活動していきたい、あまり海外にでたいと思わないなど国際的活動や外国に関心がない者(3名)があり、コミュニケーションに困難を感じていることや国際的な活動に関わる機会の不足があげられていた。また、「今、忙しいから」と時間的余裕がないことも理由にあげられていた(1名)。

### 2) 渡航経験の有無

外国へ渡航した経験を持つ者は12名(34%)であった。渡航先はアメリカやアジアが多く、主な目的は修学旅行や家族旅行であった。オーストラリアにホームステイを目的として1か月滞在した者もいた。

### 3) 外国人の友人について

外国人の友人がいると回答した者は8名(23%)であり、ほとんどの者はいなかった。いないと回答した者の

うち、20名(57%)が今後外国人の友人を作りたいと考えていた。

### 4) 大学以外で学んでいる言語

大学以外で学んでいる言語があると回答した者は5名(14%)であり、主に英語を学んでいた。英語以外では1名が韓国語を学んでいた。ないと回答した者は29名(83%)であり、ほとんどの学生が学外での外国語の習得に関する活動はしていなかった。

### 5) 学内の海外研修に関して

学内の海外研修に関する説明会を知っているかどうかについて、6名(17%)の学生が知っていると回答した。この6名のうち、参加したことがある者はいなかった。知らないと回答した者は28名(80%)であり、ほとんどの学生は学内で説明会があることを知らなかった。学内の海外研修プログラムの参加希望(表3)について、はいと回答した者は15名(43%)と約4割を占めた。記載された理由は主に外国に興味があることと関連しており、その内容として、海外を見たい・興味がある・文化に触れたい(6名)、海外で勉強したい(2名)、海外の医療への関心(2名)、言語習得への希望(1名)などがあげられていた。参加したいがどのようにしたら良いかわからないとの意見もあった(1名)。

一方、半数(19名)の学生は参加を希望していなかった。その理由として、忙しく余裕がないこと(7名)が最も多く、「看護のカリキュラムだと難しいと思う」「他にもっとやることもある」との意見があった。その他には経済的負担(3名)、興味がない(2名)、英語ができない(2名)、面倒くさい(1名)などの意見があった。

表3 学内の海外研修プログラムの参加希望と国際活動への支障理由

「はい」の人;		「いいえ」の人;	
その理由	n=15	その理由	n=19
海外に行ったことがないので外の世界を見たい	2	忙しいから	7
海外に興味があるから	2	お金の面で厳しい	3
フランスやハワイなどに行って勉強し色々学びたい	2	海外にあまり興味がない	2
海外の文化に触れたいから	2	英語ができないため	2
海外の医療活動に興味がある	2	面倒くさい	1
言語を習得したいから	1	無記名	4
大学の講義	1		
その他	1		
無記入	2		
国際的活動への支障理由	n=4	国際的活動への支障理由	n=7
経済面	2	言語	6
言語・文化	1	経済面	1
家族の心配	1		

6) 国際的活動に関わる際の支障

国際的活動に関わる際の支障についてと回答した者は11名(31%)であった。その理由としては、語学に関するものが7名と最も多く、次いで経済的理由3名、家族の心配1名、文化の違い1名であった。これらの理由の順位は、学内の海外研修プログラムへの参加への希望の有無と比較すると違いがみられた(表3)。参加を希望する学生で支障があると回答した学生4名のうち、最も多かったのは経済的理由(2名)、次いで言語・文化(1名)、家族の心配(1名)であった。一方、参加を希望しない学生で支障があると回答した学生7名で、言語(6名)をあげた者が最も多く、経済的理由は1名であった。

7) 参加してみたい国際的活動(図1)

最も多くあげられた活動はホームステイ(22名)であり、次いでボランティア(18名)、病院見学(16名)であった。大学訪問(11名)や語学留学(10名)もあげられた。しかし、国内での異文化交流、国際保健医療の学習会や学会、講演会などは参加したいと回答する学生は少なかった。

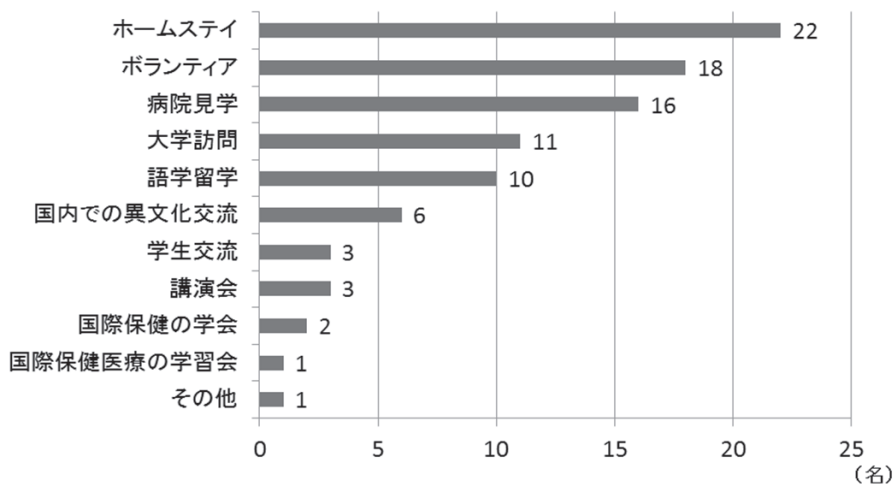


図1 参加してみたい国際活動(複数回答あり)

8) 海外研修参加に捻出することが可能な費用

捻出可能な研修費用(図2)では、半数を占める18名(51%)が9万円以下、次いで12名(34%)が10~19万円と回答した。約9割の学生において19万円以下が捻出可能な範囲であった。3名(9%)が20~29万円と回答した。その他と回答した2名のうち1名は「分からない」と記載した。

9) 海外研修に参加することが可能な期間

研修参加に可能な期間(図3)として最も多かったのは、1~2週間であり、17名(48%)の回答者数であった。次いで9名(26%)が1週間以内、4名(11%)が2~3週間と回答した。

10) 関心のある国や地域

最も関心のある地域(表4)はヨーロッパ地域(19名)であり、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどがあげられていた。次いでアメリカやカナダなどの北米地域(10名)があがっていた。アジア(6名)やオセアニア(6名)にも関心が示された。アフリカ地域は1名であり、中東地域は0名であった。行きたい理由としては、

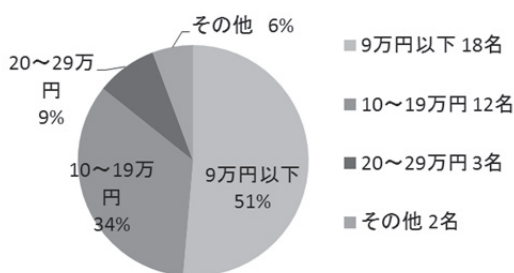


図2 海外研修参加に捻出可能な費用

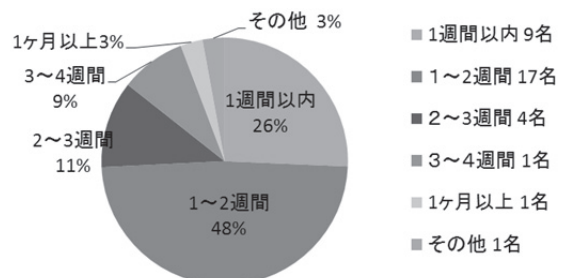


図3 海外研修に参加可能な期間

観光地への訪問、現地の食べ物への好奇心、現地の医療、治安の良さなど多岐にわたっていた。

#### 11) 大学の国際的活動に関して期待すること

本学に期待する国際的活動に関して最も多かった意見は、海外に行くことに関する活動であり(6名)、アメリカやドイツ等医療が発展しているところに行きたい(2名)、看護学部独自の内容にして欲しい(外国の病院に行く・他の大学がしているようなもの)(1名)等の記述がみられた。また、金銭面での補助への希望(1名)も述べられた。看護系の国際連携(1名)との意見もあり、前述の「看護学部独自の内容にしてほしい」との意見と共に、看護学部である特徴を生かした活動への期待が述べられていた。

## IV. 考察

### 1. 看護学部学生が抱く国際的な活動への関心

今回の調査では35名中、約7割を占める24名が国際的活動に関心があると回答した。しかし、回収率は42%と半数以下であることから、学生全体としては調査への関心は高くなかった可能性がある。今回の回答には国際的活動に関心を持つ学生が積極的に調査に協力したことが考えられる。看護学部全学生数からみると関心があると回答した24名の割合は28%となる。全体的には約3

割の学生が国際的活動に関心を持つと推測される。他大学の看護学部学生の国際的活動に関する意識調査では、国際交流や海外の看護事情に関心があると答えた学生(対象者数124名、回収率35.6%)は70.2%との報告があり(西頭ら, 2014)、本学における調査結果と類似した結果がみられている。また、濱畑ら(2004)の同様の調査(対象者数330名、回収率95.7%)では約5割の学生が、将来看護職として保健・看護活動やボランティア活動を通じた国際交流を希望していると回答している。これらの調査では対象者は1年生から4年生までであり、異文化や国際保健に関連した科目を受講した学生も含まれているため、本学の対象者とは特性が異なる面もある。その点も考慮した上での参考とするならば、本学において国際的活動に関心を持つ学生が約3割であることは、他大学との比較において大きな違いはなく平均的な割合であると考えられる。

関心のある国際的活動について、国際保健医療活動(青年海外協力隊、国境なき医師団、ユニセフ、貧しい子どもへの医療活動)および留学・研修の2つに大別できた。留学・研修については、歴史や文化に関する学びや交流、語学の学習への関心がみられた。また、学生が参加したいと思う国際的活動に関しては、ホームステイが最も多く、次いでボランティア活動、病院見学であった。現地の生活文化や医療を知ることや実際に自らを活かして行

表4 関心のある国・地域とその理由 (( )は人数 複数回答あり)

地域	国・地域	行きたい理由	地域	国・地域	行きたい理由
ヨーロッパ	イタリア・フランス・スペイン	世界遺産を見て回りたいから	北米	アラスカ・カナダ	大自然に触れたいから
	イギリス・イタリア・フランス・ドイツ	世界の先端をいって、スポーツも盛んであるから		アメリカ	医療が発展していそう 様々な要素を吸収し磨かれない
	イタリア・イギリス・フランス	食べ物に関心があるから		カナダ	アメリカよりは安全そう
	イタリア・スペイン・ヴェネチア	この国の世界遺産を見たい	オセアニア	オーストラリア・ニュージーランド	穏やかな国に行ってみよう
	ドイツ	医療が進んでいるから サッカーを観てみたいから		オーストラリア	日本人を受け入れてくれそうだから 留学しやすいと聞いたから
	イギリス	行ってみたい		ニュージーランド	絶滅危惧種を見たいから
	フランス	美術が好き	南米	-	医療が発展していそう
	トルコ	TVを見て興味をもったから	アフリカ	-	発展途上国と言われていたところから どんどん発展しているところもある今、 医療においても様々な問題や格差があるから。
イタリア	料理がおいしいから				
アジア	シンガポール・台湾	最近人気だし、買い物など	その他	ニュージーランド	世界で一番天国に近い島といわれているから
	韓国	日本に近い文化を味わってみたい		ロシア	友人がいるから
	中国	発展しているから		どこでもいい	
	台湾	丸ふんにいきたい			
	シンガポール	景色がよく、治安が良いから			



動することへの希望があることが分かった。看護学を学ぶ学生であることから海外の医療にも関心を示しつつ、外国の歴史や文化、生活体験など幅広い関心があることが分かった。これらについても、今後の学内や学外における国際交流推進活動の企画を検討する際の参考としていく必要がある。学士課程における卒業時到達目標として「グローバル化・国際化の動向における看護の在り方について理解できる」ことが示されており（文部科学省, 2011）、授業以外の学生生活においても国際交流に関する機会があることは、看護学部の学生がこれらの能力を養う上で有用と考える。

留学や研修については、看護学部の学生も志願できる本学の学生を対象にした海外研修プログラムが既に存在する。学内の研修プログラムには15名（43%）が参加したいと考えていた。しかし、学内で実施されている海外研修説明会について知っていたのは6名（17%）であり、28名（80%）の学生が知らないと回答した。学生は学内における研修についてよく把握しないまま、活用できていない可能性が考えられる。既存の海外研修プログラムについて学内説明会の実施方法や周知方法の工夫など学生に情報が届くよう検討する必要がある。また、今年度ポートアイランドキャンパスにおいて、教員や学生による国際ランチタイム報告会を国際交流推進委員会により実施した。報告会では学内の海外研修プログラムに参加した他学部の学生報告もあり、このような機会を定期的に設けることは、学生が研修内容についても情報を得る機会になると考える。看護学部学生にとっての参加しやすさについて、実際には他学部と看護学部ではカリキュラムが異なり、参加できる研修は限定される現状がある。また、研修内容は語学や異なる文化に関する研修であり一般的な内容となっている。今回の回答からは研修内容として、海外の医療や看護ケアに関することへの興味が示された。そのため、海外の医療や看護を学ぶ内容を含んだ海外研修プログラムを看護学部で企画することもニーズがあると考えられる。

一方、国際的活動に関心がない理由として、「国際的な活動に触れ合う機会がなかったので興味が無い」というものがあつた。学内においても日常的に国内外における異文化に関連する事柄について知る機会を設けることは、関心を持っている学生ばかりではなく、そうではない学生に対しても刺激となる可能性がある。

また、「コミュニケーションがとれない」「英語が苦手」など、言語を介したコミュニケーションに困難を感じて

いることがあげられていた。学内の海外研修プログラムを希望しないと回答した学生19名についても、自分が国際的活動に関わる上での支障として最も多くあげた理由は言語ができないこと（6名）であつた。語学を苦手とすることが学生の国際的な活動の大きな支障となっており、語学面へのフォローについて何らかの工夫をすることが、言語に起因する国際活動への関心の障壁を取り除く具体的な試みとなると考える。これについては、3. 国際的活動に関わる際の支障において後述する。

関心を持っていないことの他の理由として、「今、忙しい」ということもあげられた。忙しさは、学内の海外研修への参加を希望しない理由として最も多いものだった。看護学部のカリキュラムは時間的余裕があまりないため、異文化について触れ、考える機会が学内において日常的にあることが望ましいといえる。また、今後、看護学部のカリキュラムや時期を考慮した海外研修プログラムを企画できれば、参加を希望する学生は増える可能性があることも示唆された。

## 2. 学生と異文化の接点

外国人の友人が「いる」と回答した学生は8名（23%）であり、ほとんどの学生がいない状況であつた。しかし、「いない」と回答した学生26名中20名が外国人の友人を作りたいと考えており、異文化に対する関心を持っていることが示唆された。国際的な活動としては高い関心を持っていないくても、日常的に異文化と接する機会については意欲がある学生が存在していると言える。今年度、看護学部では、フィリピン大学大学院修士課程の学生が看護学部の教員の指導を受けながら3ヶ月間の研究活動を行った。その際、ボランティアで神戸市内の観光案内を行う学生を募集したところ、3名の応募があつた。その後、交流が進むにつれボランティア学生数は6名まで増加した。英語を得意とする学生はいなかったが、楽しく交流し、英語学習への動機を高めていた。これは、教員の教育・研究活動が国際的つながりを持つことによって、間接的に学生にも国際交流の機会を与える一つの例であつた。このように、普段の学生生活において異文化に触れる機会が日常的にあることは、学生のニーズに沿ったひとつの国際交流の在り方といえる。今後、教員や分野・領域、学部において国外の研究者との連携がすすみ、教育や研究に関する交流が盛んに実施されることが望まれる。加えて、平成27年度に学内における国際的活動として国際ランチタイム報告会を実施した。こ

これは、海外渡航した教員や学生の活動報告を気軽に聞くことができる機会であり、間接的ではあるが他者の経験を通して様々な国や地域を知ることができる。定期的な活動として実施していくことで、多様な文化を知る機会を提供していくことができると考える。

今回の調査で実際に使用可能な外国語について、11名(31%)が英語と回答した。高校卒業段階の英語力の達成目標(文部科学省)である英検準2級～2級を取得している学生は8名(23%)であった。外国語の習得について、学外で学んでいると回答した学生は5名(14%)であり、ほとんどの学生は学内での学習が主であった。他の質問項目の回答では看護学部のカリキュラムが忙しいという理由が多くみられており、学外で学ぶ時間の確保が難しい状況にあることも推測される。学習している言語は英語が多く、英語以外の言語としては1名が韓国語を学んでいた。本学では第二外国語としてドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、イタリア語を学ぶ機会がある。言語と文化の間には密接な関係がある(黒木, 2014)といわれている。外国の言葉を学ぶことは、単なる言語の学習に留まらず、学生に異なる文化への気付きや多様な視座を与えるきっかけとなる。また、平成27年度の日本における在日外国人数は約217万人(法務省, 2016)、訪日外国人数は約1974万人(日本政府観光局, 2016)と増加し、多様な国籍の人々が存在する。神戸市においても登録外国人数は約4万2千人、国・地域の数は132に及ぶ(神戸市, 2016)。看護職者が異なる文化や異なる言語を母国語とする人々を対象にケアに携わることは、既に日常化している。また、経済連携協定(EPA)に基づくフィリピンやインドネシアからの看護師や介護福祉士の受け入れも既にあり、今後外国人の同僚と共に働く機会も増加すると考えられる。学生たちが、第二外国語など学内のカリキュラムを活用し、様々な言語に触れることが望まれる。

渡航経験について、12名(34%)の学生が、修学旅行や研修、家族旅行などを通じて異文化圏に滞在した経験を持つことが分かった。渡航先は北米地域とアジア地域が多かった。今後行きたい国・地域として関心が寄せられた場所は、ヨーロッパが多く、次いでアジアや北米、オセアニアであった。文化への関心や医療が進んでいるというイメージがあることが理由としてあげられていた。学内での企画や将来の海外研修について、学生の志向も参考にして検討したい。一方、多くの学生は渡航体験を持たないことから、このような体験を持たない学生

に対して有用な異文化体験ができる機会を持てるよう検討していく必要がある。また、学生が渡航に関する計画をたてるときに、危機管理についての視点や具体的な知識を得ることは重要である。学内においては、定期的に渡航者対象の危機管理研修会が実施されているが、学生自らが情報収集し、危機管理できる力を持てるよう、関係する資源の情報を提供し、安全な渡航に向けて働きかける必要がある。

### 3. 国際的活動に関わる際の支障

国際的な活動に関わる際の支障があると回答した学生は約3割であった。理由は主に語学に関するもの(7名)と経済面(3名)であった。語学については、外国語能力を必要とする活動においては必要時通訳などを検討し、学生が内容を理解し興味を持てるように支援する必要がある。また、学内の海外研修プログラムは、外国語を得意とする学生ばかりが参加するのではなく、苦手とする学生であっても事前演習などのフォローアップを行い、研修参加を通じて語学の力量形成が図れるような研修を企画できれば、敷居を低くすることができ、かつ、学生のコミュニケーション能力を向上させる一助になるのではないだろうか。香月と荒井(2009)による短期海外研修における看護学生の英語学習の認知に関する調査から、海外研修後に英語の学習方法が分からないという「スキル認知」が有意に低下し、学生は英語の経験型学習である海外研修を通して、英語学習に対する抵抗感が薄れ、研修での体験が学生にとって英語学習のヒントやきっかけになったことを報告している。語学を苦手とする学生に対しても、実際に海外で英語を使う体験を支援することにより学生の苦手意識が変化する可能性もある。語学を苦手とすることを理由に国際的活動への参加を躊躇している学生も参加してみようと思える企画が必要と考える。本学の既存の海外研修プログラムでは、演習と組み合わせて語学面でのフォローが行われているものもあるため、そのことを学生に伝えていくことも必要であろう。

経済面に関しては、基本的には学内での活動を主軸とすることは学生への経済的負担がなく、無理がない活動といえる。20万円以下が可能と回答した学生が約9割であったことから、今後海外研修プログラムを企画する際には、予算についての検討と共に、この範囲を超えない費用設定が望ましいといえる。

#### 4. 看護学部における国際交流活動の方向性

今年度、看護学部において国際交流推進委員会で企画実行した活動は、国際ランチタイム報告会、外国からの大学教員訪問時の特別講義、青年海外協力隊経験者によるセミナーなど学内で行える活動が中心であった。日本における私立看護系大学の国際交流活動に関して、カルデナス、西頭、月野木、小林（2013）の報告によると、学生の海外留学・研修（66.7%）、留学生の受け入れ（38.1%）、教員の海外留学・研修（26.2%）、国際共同研究（16.7%）、定期セミナー・研究会（14.3%）、国際交流サークル（14.3%）、遠隔授業（4.8%）であった。海外への留学・研修といった学生自身が直接異なる文化と接する機会を提供している大学が7割を占めている。本学部の学生のニーズとしても、ホームステイ、ボランティア、病院見学、大学訪問、語学留学など、直接海外に行くことで経験できる活動への関心は高く示された。語学に関しては本学の全学部対象の研修プログラムが存在し、学生が活用できる機会がある。病院見学など医療や看護に対する関心が高かったことは、看護を学んでいる学生であるという特性が反映されていると考える。看護学部の学生のニーズを反映した海外研修の企画を検討することも委員会の役割として考えられる。今回の調査では、学生が海外の医療や看護に関して具体的にどんなことを知りたいのかまでは明らかにできていないため、今後の企画においては確認していく必要がある。また、「教員の海外留学・研修」や「国際共同研究」は、学生にとっても間接的に海外の情報に接したり、関わったりする機会もあることから、教員学生双方にとって有用な国際的活動と考えられる。

参加してみたい国際活動として、国内での異文化交流と回答した者は6名であり、海外での活動に比較して少なかった。活動としては関心がなくても、外国人の友人を持ちたいという気持ちは6割の学生が有していることから、異文化への関心が必ずしも低いとは言えない。講演会に関しては本学の学生の関心は低かった。このように、学生が好む国際交流の在り方を模索しながら提供できる機会を検討することも国際交流推進委員会の役割であると考えられる。

国際交流活動に関する課題として、人的資源の限界、資金の乏しさ、言葉の問題、カリキュラム上の制限、不十分な体制づくり、安全保障や宿泊先確保などの環境的限界があることが報告されている（カルデナスら、2013）。本学部における今後の活動においても同様の課

題は存在する。まずは、これらの学内で日常的に実施できる活動を継続し、定着化を図り、関心を持つ学生と持たない学生の双方に対し、日常的に様々な文化について知る機会を提供していくことが実行可能な活動と考える。これらを実行しつつ、学生の海外研修や外国の研究者・研究機関との連携を推進し、学生や教員自らが多様な国際交流の機会を創り出せるように活動することが必要と考える。

#### 5. 本調査の課題

今回の結果から、看護学生が国際的活動に関わるできない理由に、「忙しさ」が多くあげられた。調査を実施した時期が入学間もない7月であり、1年生にとっては学び方も高校生から大学生へと大きな移行の時期にあったことが考えられる。また前期は、毎日授業があり、空き時間がほとんどないカリキュラムであったため、時間的余裕がない状況であったことも回答結果に影響した可能性がある。カリキュラムの過密さは学年や選択科目によっても違いがあり、今後は調査時期の検討や複数の学年を対象とした調査を行い、国際的活動における看護学生の動向を把握する必要がある。しかし、現時点における本学部生の国際活動への関心の有無やその理由を把握する上では示唆が得られており、学部に還元していきたい。

#### V. 結論

今回の調査から、国際的活動に関心を持つ学生のほかに、関心を持っていないと回答しているが異文化には関心を持つ学生の存在もあることが分かった。海外研修プログラムは関心のある活動だが、看護学部のカリキュラムによる「忙しい」という感覚や語学が苦手であること、経済的負担が支障となっていることが明らかになった。学内で日常的に異なる文化や外国のことに触れる機会を設けると共に、異なる文化での看護や医療、人々の生活を知ることができ、加えてボランティア活動など学生自身が考え行動する体験ができる研修プログラムの企画についても検討が望まれる。また、学生だけではなく、教員や分野・領域、学部においても外国の研究者や研究組織と連携を深め交流の機会を持つことは、学生にとっても国際的な活動に触れる機会を提供できる可能性がある。国際連携推進に向けた委員会活動の在り方の検討も重要と考える。



## 謝辞

本調査にあたり協力いただきました学生の皆さまに感謝申し上げます。

## 引用文献

- カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ, 小林貴子. (2013). 日本私立系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査, 大阪医科大学看護研究雑誌, 3, 147-156.
- 黒木雅子. (2014). 異文化論への招待「違い」とどう向き合うか, 朱鷺書房.
- 香月毅史, 荒井淑子. (2009). 看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査, 上武大学看護学部紀要, 5 (1), 12-18.
- 神戸市. (2016). 第91回神戸市統計書 平成26年度版, <http://www.city.kobe.lg.jp/information/data/statistics/toukei/toukeisho/26toukeisho.html>
- 日本政府観光局. (2016). 訪日外客数(2016年1月推計値)平成28年2月16日, [http://www.jnto.go.jp/jpn/news/data\\_info\\_listening/pdf/160216\\_monthly](http://www.jnto.go.jp/jpn/news/data_info_listening/pdf/160216_monthly)
- 西頭知子, 月野木ルミ, カルデナス暁東, 小林道太郎, 小林貴子. (2014). 看護学教育における国際交流活動に関する学生の意識調査, 大阪医科大学看護学研究雑誌, 4, 96-104.
- 濱畑章子, 片岡由美子, 米田雅彦, 平井さよ子, 古田加代子, 原沢優子, 星野純子. (2004). 看護学生の国際交流に関する意識調査. 愛知県立看護大学紀要, 10, 27-32.
- 法務省. (2016). 在留外国人統計 統計表(2015年6月末), <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001139146>
- 文部科学省 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf)

